

王治本 明治十五、六年の北陸漫遊と詩文交流

― 加賀・越中・能登・越前

柴 田 清 継

はじめに

明治十年（以下、誤解を招く恐れのない場合は「明治」を省略する）春に来日して以来、東京に居住し、ほとんど関東地方から離れることのなかった王治本（号漆（泰） 園。一八三五―一九〇八）が、十五年の晩春から、初めて長期にわたる日本国内旅行に出かけた。この旅行の前半に当たる、東海道を経て十五年夏の越前滞在までの足跡と詩文交流の様子については、既にまとめて発表した。^{（注1）} 本稿はその続篇で、十五年八月から十六年五、六月ごろまでの加賀・越中・能登・越前における彼の足跡と詩文交流の跡を探ろうとするものである。

一、加賀金沢、及び越中福光

八月九日以後に福井を發つた王治本は、一九六四年から着手された、さねとうけいしゅうの調査によると、同月十八日に金沢に着いたらしい。さねとうは、中国語学者山岸共氏^{（注2）}（一九一三）を介して閲覧した、王治本の金沢での筆談資料に拠り、王治本のこの時の金沢での活動の跡を調査し、紹介してくれている。^{（注3）} 詳細はさねとうの叙述に譲ることとし、ここではその概要を紹介することにした。

すなわち、八月十八日に金沢に着き、上今町の森長という宿に投宿した王治本は、日本人松村茂平を秘書として連れていた。^(注4)
王は小野湖山(二八一四～一九一〇)から横山政和、号は蘭洲あての紹介状を携えてきており、翌朝その蘭洲に手紙を書いた。二十日、
蘭洲は王を訪ね、午後、兼六園で詩の会を開いた。この日、来会した者には、山岸弘^(注5) (号は北洲、もと藩校明倫堂の教師)・吉村政
行・渡辺琢^(号は樗軒)・山本威斎^(名は恵)・横山正誠^(号は鶴洲、政和の長子で十五歳。詩を作った)・横山隆起^(号は梅坡、十一歳。絵を描いた)・
横山隆主・吉倉物佐などがあつた。二十一日、王は県令千阪高雅の招宴に赴いた。県令は宮島誠一郎と同郷で、王は宮島の紹
介状を持ってきた。二十五日は、山岸北洲の家を訪れた。ここでは北洲の詩文を添削した。その中に「亡弟山岸惇碑銘」
もあつた。二十六日には、金沢を發つて、越中の福光へ行った。

以上、さねとうの叙述に拠るが、金沢到着後わずか一週間ほどで、何はさておきといった感じで福光(金沢市と接し、金沢から約
二十キロメートルの距離)へ赴いたのは、そこが松村西莊の故郷であつたからだろう。ところで、石崎家も、松村家と並ぶ福光の
名家であるが、江戸中期に分家した喜兵衛の曾孫である徳太郎(号松所)とその子、寛は、一家を挙げて、福光に関する史料の「集
輯」に尽くした。^(注10) その石崎寛編輯の『松所文獻 松村西莊』に、王治本から西莊あての書簡に依拠して、王はこの時の旅にお
いて「途中一度西莊と別れ、(中略) 初秋の候に再び会して、金沢富山福光辺に滞在し」た旨述べられているが、あるいは「秘書」
の松村茂平が一足先に西莊を故郷福光へ送り届けたうえで、単身福井辺りで王と合流して一緒に金沢に入り、王を福光まで案
内したのかもしれない。このように想像するならば、さねとう氏の金沢到着時の説明に西莊への言及がないことにも説明がつく。
さて、王治本は福光に半月ほど滞在したようであるから、一定数の詩を詠んだと想像されるが、現在判明しているのは、「含
津即景」^(注12)と題する七律と、松村卓堂(和一郎)一八六四～一九二二の嘱に應じて詠んだ「福光懷古」^(注13)詩のうちの一首である。前
者の詩句は石崎寛が『松所文獻 近世福光町史』の中で引用・解説し、^(注14) 後者の詩句はさねとうが「王治本の日本漫遊」の中で
紹介してくれている。^(注15) それら以外で、筆者自身の調査により知り得た事柄で、この時の福光滞在中のことと考えられるものを
紹介しておく。

まず、『金城新誌』^(注16)第三十四号(十九年二月五日)に掲載されている王黍園^{ママ}の「養真堂記」である。越中で知り合った友人で酒造家の天富某^{あまとも}に請われて、その堂名について記した文章である。文中に福光という地名は見られないが、その執筆の日付が「尖緒壬午秋七月既望」^{ママ}、すなわち陽暦の十五年八月二十九日となっていることから、ここで取り上げておくことにした。

次は、石崎寛の『桜所文獻 松村西莊』に掲載されている王の「雲峰楼」と題する文で、貴重な資料なので、石崎によるその「訳文」(書き下し文)ともどもそのまま転載しておきたい。『桜所文獻 近世福光町史』によれば、「中秋にいたり福光をたずね」た王が、福光で「生徳堂主人から、新築になる三層楼上に招ぜられ、月明下の福光の夜景を満喫し」て草した一文で、「生徳堂とは、中酒屋彦右衛門の弟平九郎を初代とする四代目の石崎平九郎らしく思われる」という。^(注17)

雲峰楼 王治本

壬午秋七月、余来含津、適斯楼新成。楼主生徳堂主人、風雅愛客、余至即夕過訪、邀余登楼。余以夜辞。老人曰、今夕月明如昼、曾囑張燈捲簾以俟。請即一眺。余察其意誠、從而往。一楼之上、又上一層。楼不甚大、而精潔幽雅、四面皆牕。老人引余倚窓坐、指而言曰、其東群巒矗列者、為五箇山、其北二岫斜垂者、為双鬢山、其西岡林叢密者、為育王山、其南石岩突兀者、為人形山、東北崇高而特峙者、為立山、西北幽邃而若谷者、為源氏峰。此外凝烟疊翠、不勝屈指。余從月下遙覘、只覺山容重疊、樹影迷離。其為浮雲之卷舒乎、其為遠峰之縹緲乎、若可辨而不可辨也。老人索余名楼。遂名之曰雲峰楼。

(右の訳文)

壬午秋七月、余含津に来る。適々斯の楼新に成る。楼主生徳堂主人、風雅にして客を愛す。余の至るや即夕過訪し、余を邀へて楼に登らんとす。余夜なるを以て辞す。老人曰く、今夕 月明かにして昼の如し。曾ち囑して燈を張り簾を捲き以て俟つ。請ふ即ち一眺せよと。余其の意の誠なるを察し、從而往く。一楼の上、又上ること一層。楼は甚だ大ならず、而れども、精潔幽雅、四面皆牕なり。老人余を引いて窓に倚りて坐せしむ。指して曰く、其の東に群巒矗列する

者は、五箇山と為す。其の北に二岫斜垂する者は、双鬢山と為す。其の西の岡林叢密なる者は、育王山と為す。其の南に石岩突兀なる者は、人形山と為す。東北の崇高にして特に峙つ者は、立山と為す。西北の幽邃にして谷の若きものは、源氏峰と為す。此の外凝烟疊翠、指を屈するに勝へず。余月下より遙かに覩ふ。只山容の重疊、樹影の迷離を覚ゆ。其の浮雲の卷舒たるか、遠峰の縹緲たるか、辨ずべきが若くにして、尽く辨ずべからず。老人余に楼に名づけんことを索む。遂に之に名づけて雲峰楼と曰ふ。^(注18)

ところで、石崎は王治本が福光を訪ねたのを十五年の中秋(陽暦の九月二十六日)としているが、「雲峰楼」の文章では陰暦七月の「月明らかなること昼の如」き日とされているから、陰暦の七月十五日(陽暦の八月二十八日)ごろと見るのがふさわしいであろう。その方が、さねとうの記述とも合致するのである。

そのほか、松村卓堂の父、松宇が建造した茶室、迎月亭^(こうげてい)(松村寿氏邸内)に今も「立山為 迎月亭主人属 茶園逸士」という識語のある、次のような七絶が書軸にして掛けられている。^(注19)

峭峰如劍矗当空	峭峯	劍の如く	矗 ^{たかくそび} えて	空に当たる
影落能州碧海	影は落つ	能州	碧海の中	
鼎足争雄唯富白	鼎足して雄を争うは	唯	富白(富士山と白山)	のみ
其餘羣岫尽兒童	其餘の羣岫は	尽く	兒童	

この詩は十六年一月二十五日発行の『花月新誌』第一三〇号に「望立山」の題で掲載されている。^(注20)

さて、ここで再び、金沢での筆談資料に基づいた、さねとう氏の調査結果に戻ることしよう。王と「松村」は、福光から

富山に行こうと思っていたが、西莊が病氣になったので、九月十四日、金沢に引き返した。そして、十七日は山岸北洲の招宴に赴いた。この日、集まった者には、弘の子千吉・内海吉堂（名は復、敦賀の人。画を善くし、久しく中国を旅行した）・小池梅所（大聖寺の人）・河波櫻園（名は有道）・井口孟徳（名は濟）・中村竜溪（名は政太郎）・横山兄弟・森虚堂（名は惇成）・広岡青嶽（名は有久）・千吉の弟がいた。十八日は亀田貞勝の招宴に赴いた。腸胃熱を患っていた蘭洲が、面接はできるようになったので、二十三日に王を自宅に招いた。この日陪席した者は、仁洲禪師・渡辺從吉（医師）・林敬忠（書家）だった。蘭洲は家宝二点を見せ、真贋について王の意見をきき、また、家蔵の画に賛を頼んだ。二十四日、蘭洲は王あて次のような手紙をしたためた。「富山に行くのなら、もとの家老、戸田方義に紹介しよう。七尾に行くそうだが、七尾から和倉温泉へ、陸路一里半、海上二里の田舎村に小泉清右衛門という家があり、私の定宿だから、行くなら、そこに泊まれ」。二十七日、蘭洲はまた王に手紙を書き、王から詩を贈られた札を述べ、潤筆料については「松村君」の指示に従うこととし、また、「富山に行ったら、岡田順二・前田則邦にも会え」とも記した。一方、山岸家の方では、十七日の招宴の後、十九日に北洲が王の旅舎を訪れた。そのとき、王は北洲のために書いた絹代を請求した。二十日には千吉が絹代一元を持って旅舎を訪れ、筆談をした。二十一日には、北洲が王から借りた『絶史論存』^(注26)十五本を返しに行った。このとき広岡有久に頼まれた「瓶城」の二大字を王に揮毫するように頼んだ。潤筆料一元。千吉は二十四日午前にも旅館に王を訪ねて筆談をした。二十四日の午後には橘建堂（金沢藩の文学教師。十四年歿）の祭りがあり、北洲はここで王に会い、筆談をした。二十五日には北洲が王の旅舎を訪ね、この時「先生の書を請う友人が多い」と伝えた。二十七日には北洲が王を自宅に招待した。その時の筆談で王は「先日、新地へ出かけた。富山の高峯先生が宿に来て、自分を誘ってくれた」と述べた。

以上で、筆談資料に基づいた王の金沢での活動のまとめを終えることにするが、最後にその名が出てきた「高峯先生」については後述することとし、如上の交流の中で横山蘭洲が残した七絶二首が、その『環翠楼詩鈔』^(注27)に収録されているので、ここに取り上げておきたい。

更賦一律呈王泰園先生

邂逅方欣得好期 邂逅 方に欣ぶ 好期を得たるを
休言人事易參差 言う休かれ 人事 參差（思うようにならない）たり易しと
曾因文字通名字 曾て文字に因りて名字を通じたり
轉覺新知勝旧知 轉た覺ゆ 新知 旧知に勝るを
一坐光風清臺臺 一坐の光風 清くして臺臺（美しい）たり
半天珠斗影離離 半天の珠斗（北斗七星）影 離離たり
滄波萬里他時夢 滄波 萬里 他時 夢みなば
不識何由寄所思 識らず 何に由りてか 思う所を寄せん

泰園王先生有餞予東行作、次韵言謝、而予因病緩期、先生先予赴富山矣

夜半鐘沈燭影微 夜半 鐘 沈^たえて 燭影 微かに
東離西別夢相依 東離 西別 夢 相依る
逢秋癡蝶難勝瘦 秋に逢える癡蝶 瘦するに勝え難く
遶岫頑雲尚倦飛 岫を遶る頑雲 尚お飛ぶに倦めり
秃筆慵題愁裏字 秃筆（詩文を書く才能が乏しい） 題するに慵し 愁裏の字
衰楊怕払病餘衣 衰楊 払うを怕る 病餘の衣
起鉤疎箔收襟坐 起ちて疎箔を鉤^かけ 襟を収めて坐れば
山月孤高鶴独帰 山月 孤高にして 鶴 独り帰る

前者は題に「更に一律を賦し」とあるから、そのもとになった作があるはずだが、それは不明である。第三句に「僕五年前
マ
已通書信」との蘭洲の自注があるが、さねとう氏が紹介している筆談の内容によれば、蘭洲が王に手紙を出し、詞餘の添削
を頼んだことがあったようである。^(注28)

後者の題の意味するところは、蘭洲が東行することになり、王が餞別の詩を詠んだ。蘭洲はその詩に次韻して謝意を表したが、
病のため蘭洲の東行が延期になり、王の富山行きの方が先んじることになったというものである。蘭洲の病というのは、上述
の「腸胃熱」かもしれない。^(注28)

さて、上記の「高峯先生」は、当時富山病院院長を務めていた高峰精一（一八二五？～一八九九）に相違ないと思われる。工学博士・
薬学博士高峰讓吉の父として知られるが、漢詩も作った人であり、亀谷龍二・橘米次郎編『越中古今詩鈔』の収録作者紹介に
よれば、槐処、聴松と号し、高岡の人。藩医であったが、維新後、富山県病院長となったという。高峰の誘いだけがきっかけ
だったか否かは不明であるが、王治本は金沢を離れ、富山へ行くことになった。

二、越中各地

ここで三度、^{みぐ}さねとう氏の筆談のまとめを参照すると、北洲が王を旅舎に訪ねた九月二十五日から数日後（高峰から誘われてか
らは直ちに、ということになるうか）、つまり九月末か十月初め、王は「金沢をたつて、富山にゆく。ここには三カ月もいた。富山を
たとうとすると、雪にはばまれて、明治一六年の正月は富山ですごした。正月六日、富山をたつて高岡にゆき、二十数日をす
ぐす。つぎに放生津にゆき二十数日、つぎに伏木・氷見・七尾にかけて一カ月滞在し、三月二五日、半年ぶりに金沢にかえつ
てきた」。^(注31) 本節では越中における王治本の足跡を述べ、能登に属する七尾での足跡については節を改めて述べることにしたい。

(1)「常稔倉記」の執筆と揮毫 今も富山市宮尾の国登録有形文化財「豪農の館 内山邸」内に、「常稔倉記」の額が掲げられている。「光緒壬午歳九月中澣穀旦 潮東柰園王治本撰并書」との識語により、十五年十月下旬の執筆並びに揮毫であることが分かる。字数は五百三十餘字で、王が「毎歳 石（容量の単位）毎に穀若干を取りて、諸これを倉に存し、我の之を主るに帰す。苟くも歳の歉（穀物が実らない）なるに遇わば、田有る者は、其の人の存する所の穀を以て、之を其の人に償い、田無き者は、則ち我が存する所の穀を以て、散じて之を給し、飢餓すること無からしむ」ということを実行している、神通川畔の宮尾村の富家、内山年彦宅を訪れた際、内山に「其（倉）の名を命なづけ、并びに之が記を為なす」といふことを請われ、宋の銭公輔の「義田記」にちなんで「常稔倉」と命名し、これにまつわる事柄を記したものである。（注32）

(2)遊説中の藤田茂吉らとのかかわり 自由党に遅れること半年、十五年四月に大隈重信を総理として結成された立憲改進党は、藤田茂吉・久松義典らを北関東・信州・北陸への遊説に派遣した。石崎寛によれば、福光から藤田ら一行「出迎のために出富した谷村西涯、石崎桜所の両名は、小閑を見出して、折柄滞富中の松村西莊を加えた三人で、富山病院院長高峰精一・清国人漆園・王治本の両客を、十一月一日神通河畔の料亭に招待して、木枯吹きすさび、冷雨門扉を打つ騒々しさをよそに、清談会食に一日を過した」といふ。（注34）ここで、高峰精一と王治本との詩文上の交流につき触れておこう。富山県立図書館司書を務められた太田久夫氏が一九七四年十月三日の『富山新聞』第八面「文化」欄所載の「王治本と富山県」と題する文章の中で、「私は二年前の秋に上京した折、高峰精一の漢詩に王治本が朱筆で添削したのを見せてもらったことがあ」と記しておられる。さて、藤田ら一行は同月三日には福光までやって来た。遊説旅行の詳細は、『郵便報知新聞』に藤田の執筆により「北遊紀行」という題で十五年十一月八日から十六年二月二十一日にかけて断続的に連載されているが、十六年一月十三日の同紙掲載の「北遊紀行」によれば、藤田らは二日の「夜八時福光村ニ達シ」た。翌三日の福光でのことが「北遊紀行」に次のように記されている。

午後三時石崎和善氏親睦会ヲ其家ニ開キ諸有志ヲ招ク会スル者五十餘名諸氏ノ席上演説アリ余及久松兄各一説ヲ演フ松村精一郎氏祝詞ヲ作り人ヲシテ之ヲ読マシム氏ハ著名ノ輦才子ニシテ我栗本翁ノ知音ナリ故ヲ以テ余ト相識ル前キニ余富山ニ在リ氏モ亦清客王治本ヲ伴フテ富山ニ寓ス因リテ來訪筆ヲ操リテ談話ス其近作ヲ見ル琅々誦ス可シ真ニ奇才子ナリ^(注35)

もつとも、王治本がその場にいたと明記されているわけではない。彼は福光へ同行しなかったかもしれない。

(3) 岡田呉陽・小杉復堂・渡辺停雲との唱和 岡田呉陽（一八二五～八五）はもと富山藩士で、十年、富山師範学校教諭となつた

が、翌年これを辞し、清水村（現富山市清水）に養父の岡田栗園時代からの学塾学聚舎を移し、門生の育英を楽しみとしていた。^(注36)

岡田よりも三十歳年下の小杉復堂（一八五五～一九二八）は、名は熙、十五年、石川県令千坂高雅に聘せられて石川県第二師範学校の教師を務めていた。^(注37) 渡辺停雲（？～一八八四）については、詳細は不明だが、名は正義で、「富山侯二仕」え、「富山師範学

校教官ニ任セラレ尋テ同県官吏ニ任セラレ明治十七年病テ」死んだとされる。^(注38) 師範学校で小杉と同僚であつた可能性もある。

この三人に、王治本との交流の跡を示す作品があるので、簡単に紹介しておきたい。筆者が見出したのは、呉陽六首、復堂三首、停雲一首の計十首だが、それらのうち、呉陽の七律「歩王泰（漆）園韻贈之」^(注39)と五律「泰園翁見訪席上贈之」以外は、いずれも富山を去る王への送別の作（五首）と、王の新年（十六年）の詩に対する次韻の作（三首）である。前者に属する作のうち、呉陽と復堂の各一首は、玉水楼での宴で詠まれたものである。いずれも挙げることにしよう。

泰園翁留別於玉水楼探韻得催字 呉陽（『呉陽遺稿』卷二）

玉水楼頭晚霽催 玉水楼頭 晚霽（夕方、雨または雪がやむこと） 催し

波光帶恨入離杯 波光 恨みを帯びて 離杯に入る

神江風色如相思
神江〔神通川〕の風色 相思うが如し
明歳復携琴硯来
明歳 復た琴硯を携えて来れ

漆園先生、将辞富山、開別筵於玉水楼、酒間分韻、得詩字
復堂〔復堂遺文〕下卷
江楼把酒晚晴時
江楼 酒を把る 晚晴の時
碧水溶々棹緩移
碧水 溶々 棹 移すこと緩し
野樹蕭疎無限恨
野樹 蕭疎たり 無限の恨み
不堪揮淚唱離詩
堪えず 涙を揮い 離詩を唱うに

これらの作との前後関係は測りかねるが、次にあげる二首も呉陽・復堂兩人同席しての作と見られる。

暈韻送茶園翁還東京 呉陽〔呉陽遺稿〕卷二
匆匆底事賦將離
匆匆として底事ぞ將離を賦せん
其奈停雲別後思
いかん 其奈せん (注40) 停雲 別後の思い
鮑氏雄文誰有敵
鮑氏〔南朝宋の鮑照のこと〕の雄文 誰か敵する有らん
徐翁孤榻独無期
徐翁の孤榻 (注41) 独り期する無し
欲嘗人世甘酸味
人世 甘酸の味を嘗めんと欲し
遍訪江湖新旧知
遍く訪う 江湖 新旧の知
才学如君何所擬
才学 君の如きは 何の擬する所ぞ

龍門一躍向天時
龍門一躍 天に向かう時

漆園王先生、留吾富山五句矣。將赴蜚州、因賦此奉送、次其東京留別瑤韻。
復堂（復堂遺文」下卷）

萍迹相逢倏復離
萍迹 相逢い 倏ち復た離る たちま わか

祖筵空抱幾愁思
祖筵 空しく抱く 幾愁思

淚隨越海風濤落
淚は越海（越中または北陸地方）の風濤に隨いて落ち

鞭逐蜚山雨雪期
鞭は蜚山（飛彈の山）の雨雪を逐いて期せん

游囊吟篇爭筆錄
游囊（書物を入れる袋）の吟篇 争か筆録せん （注42）

夜牕別恨有燈知
夜牕の別恨 燈の知る有り

自來聚散本無定
自來 聚散は 本 定まる無し

只待他年會面時
只待つのみ 他年 會面の時

この二首の疊韻（次韻）の対象となっている「東京留別瑤韻」とは、王が十五年五月五日、この長途の旅行の出発に当たって詠んだ詩の韻のことである。これらは、復堂作の題の内容から見て、十五年十二月中旬から下旬にかけて詠まれたものと考えられる。なお、復堂は王治本が富山を去って向かう先を飛彈としているが、これには裏付けが取れない。その他、呉陽の五律「邀泰園翁酌別酒」（呉陽遺稿」卷二）も別れの詩であるが、これはその初句に「衡門迓文駕（衡門に文駕を迓う）」とあるから、王治本を自宅に招いての作である。

王治本の新年の詩に対する次韻の作は、呉陽、復堂、停雲、いずれにもある。ここでは呉陽の作を挙げることにしよう。

癸未新年作、歩黍園翁韻 吳陽（『吳陽遺稿』卷一）

六十今吾欠一年 六十に今 吾 欠くこと一年

風懷忘老興隨遷 風懷 老いたるを忘れ 興 随いて遷る

文才難得生花筆 文才 得難し 花を生ずる筆

清福聊娛煮茗煙 清福 聊か娛しむ 茗を煮る煙

屋後早霞初襯岳 屋後の早霞（朝霞） 初めて岳を襯てひきた

夜来新雪更飄天 夜来の新雪 更に天に飄る

肇春賀客多詞客 肇春の賀客 詞客多し

乘醉時開翰墨筵 酔いに乗じて時に開く 翰墨の筵

復堂、停雲の作は、それぞれ「癸未元旦漆園先生寄一律、因率次其韵奉酬」（『復堂遺文』下巻）、「癸未新年作、歩王黍園詞宗韻」（『越中古今詩鈔』乾、四十四丁）と題するものである。復堂の作に「寄」とあることから、少なくとも復堂に対しては、すでに富山を去った王治本が郵送したものかとも考えられる。

王治本は三十八年にも越中を訪れたので、当時存命の復堂と王との交流に関する資料は、ほかにもある。そのうち、十五、六年訪問時の作と見なすことのできるものとして、王の「小杉熙字説」があるが、次項(4)で取り上げることにはしたい。

なお、阿波加額（一八三五—一九一六、阿波加が姓。号酔夢道人）にも、王から「寄」せられた詩に次韻した次のような作があり、十八年に出版された『七曲吟社詩』（注44）巻五に載っている。韻字が上記の吳陽らの作と一致するので、王が郵送したのは同一の新年の詩であったと見てよさそうである。

酬王泰園見寄次其韻 阿波加顚

別後匆匆已隔年 別後 匆匆として 已に年を隔てたり

応憐異域物華遷 応に憐れむべし 異域 物華 遷るを

民間多混陰陽曆 民間 多く混ず 陰陽曆

野外未生梅柳煙 野外 未だ生ぜず 梅柳の煙

餘雪猶看堆塞路 餘雪 猶お看る 堆^{うすたかく}みて路を塞ぐを

片雲忽報舞降天 片雲 忽ち報ず 舞いて天より降るを

幾回朗誦陽春曲 幾回か朗誦せる 陽春の曲

疑是賡酬醉綺筵 疑うらくは是れ賡酬 綺筵に酔えるかと

この詩で気が付くのは、陽曆で新年を迎えるようになって以来、新春の季節感に混乱が生ずるようになった旨詠まれていることである。王治本は陰曆に基づいて季節や日付を記すことが多いが、この時の新年の作は陽曆に基づいたものだったのかも知れない。なお、阿波加顚は、魚津で医を業となし、かたわら清吟吟社を結び、私塾「阿波加塾」を開設し、病院「好生舎」を設立し代議士にも選ばれた人物という。^(注46)

(4)『食研斎文稿』所載の文 王治本の文集『食研斎文稿』の中に、既に取り上げた「常稔記」も含め、彼の十五、六年の北陸訪問時の作と見られる文が何篇がある。それらのうち、この文稿にしか見えない文を紹介したいと思うが、本項ではまず越中に関するものを取り上げたい。『食研斎文稿』は中国寧波市の天一閣に収蔵されており、筆者はまだこれを閲覧する機会を得ていないが、幸い寧波市在住の王治本の曾孫、王勉善氏から、氏がこの文集の文章を電子資料として入力し印刷されたもの

を贈与された。ただ、簡体字で入力されており、原資料と一致しない字が一定数あるはずであるから、引用はせず、それぞれの文の要旨と字数（概数）だけを記すことにしたい。

①「紅葉園記」 富山滞在中のある日、訪ねてきた客に西本郷村の岡崎という人の庭園の紅葉した楓の美を文に記すよう頼まれて書いたもの。内容（季節）からして十五年の作と考えられる。約四百七十字。

②「天人楼記」 王は富山滞在の二か月間、しばしば天人楼という料亭に遊んだ。かつて「藩侯游聘の地」であつたにもかかわらず維新後すたれてしまった、富山の桜木町を、源梅山がその昔の長安の平康里の如き町として復興することを提案し、自らこの料亭を建てて営業していた。^{（注47）}「将に東に帰らんとして、諸友 錢を是の楼に設」けてくれた際、梅山に依頼されて王が撰したもの。五百六十餘字。

③「藩大夫前田任斎伝略」 王が前田則邦と交わり、彼の父である富山藩主、任斎（一八〇六～七二）の「懿徳遺行を聞くを得て、謹んで為に其の略を節して以て之を叙」べたもの。四百字餘。

④「公園記」 富山藩主、前田公の居城跡が明治十三年に至って公園として復興するまでに至る経緯を、富山の友人たちに頼まれて記したもの。七百五十餘字。

⑤「小杉熙字説」 小杉に字をつけてくれるよう頼まれた王が、「敬止」とつけたこと、及びこれに関する説明を記したもの。約二百八十字。

⑥「杉木有恒伝略」 下条川に樋二百餘を埋めることによって水流を調節し、豊作をもたらした越中石割村（現富山市石割）の杉木有恒（字千里、号蘭溪）の伝略。^{（注48）}五百三十餘字。

⑤その他 ここで再び太田久夫氏の前掲の文章を参照することにした。太田氏は、王治本の「明治十五、六年（中略）、雨晴海岸を詠んだ」詩も残っていると、その詩を紹介してくださっている（題不明）。筆者はそれに書き下し文を付けて引用することにした。

石室洞開深且幽	石室洞開〔大きく広がる〕して深く且 <small>おくふか</small> つ幽く
二松蒼翠覆巖頭	二松蒼翠にして巖頭を覆う
当年一雨身暫憩	当年一雨身暫く憩い
従是名誇源予州	是れより名誇る源予州

高岡市北部の雨晴海岸には、源義経（源予州）が奥州へ落ち延びる途中、にわか雨の晴れるのを待ったという義経岩があり、その伝説を詠み込んだ作である。

三、能登を経て再び金沢へ

能登での王治本の足跡については、畑中榮氏が「清国の王ママ黍園は明治十六年に富山や金沢に来遊したが、その時江馬天江や北陸の文人達と行を共にして、七尾の紅雲亭や遊仙楼で遊んで詩を幾編か賦している」として、「買酔游仙楼上把杯賞勝不ママ覺已入醉郷」と題する七律を紹介してくださっている。（注30）

筆者が見つけたものとしては、『金城新誌』第三十八号（十九年三月十五日）に載る次のような作品がある。

光緒癸未仲春賦此贈金陽詞兄、同次能州尾湾	王黍園 <small>ママ</small> （清）
加能頻涉歴	加能頻りに涉歴し
三度喜逢君	三度喜ぶ君に逢うを

探勝尋山月 探勝して 山月を尋ね

漫遊共水雲 漫遊して 水雲を共にす

画中伝逸趣 画中 逸趣 伝え

石上勤奇文 石上 奇文 勤む

袖浦歛方治 袖浦（袖江湾のこと） 歛（やむ）び方に治（やむ）げり

何堪手又分 何ぞ堪えん 手 又 分かつに

王と共に能登の七尾湾に泊まった「金陽詞兄」とは、奈良県生まれで、十五年、金沢に来遊、そのまま永住して、その後金沢の画壇の長老として活躍した大西金陽（一八五五―一九三五）^{（注12）}のことであるが、金沢市立玉川図書館所蔵の『金陽先生真蹟詩稿』一には、この王の作に次韻したと見られる、「次清人王漆園見寄韻〔時同次能州尾湾〕」と題する作が記されている。訂正されていない句だけ引けば、「遊跡東西遍、（中略）南松陰海月、北馬嘯山雲。（中略）醉中論篆文。（下略）」となる。

能登へ足を延ばした後、三月二十五日、王治本は半年ぶりに金沢に帰ってきた。山岸弘は、二十九日に旅館を訪ねて筆談。その時、山岸が「いつ東京に帰るか」ときくと、「これから大聖寺に回り、五月中旬には東京に帰る」と答えたという。

この時の金沢滞在中の金沢の文人と王治本との交流の跡を示すものとしては、小川南疇（一八四四―一九〇八）の十六年の作で、「漆園時自越中至」という注記のある、次のような七律がある。^{（注13）}

養志堂集、贈清人王漆園。此日会者、松平松堂・小川清太・井口犀川・太田雪岳・山田履堂・東郷惺・徳田寛処・内海吉堂・小池梅処・堀蘭斎。 小川南疇

鵬程萬里去悠悠 鵬程 萬里 去りて悠悠たり

探勝深尋北陸州

勝を探り 深く尋ぬ 北陸州

学継大蘇推富瞻

学は大蘇〔蘇軾のこと〕を継いで 富瞻を推し

才兼小杜愛風流

才は小杜〔杜牧のこと〕を兼ねて 風流を愛す

魚津夜月憐霜雁

魚津の夜月 霜雁〔秋雁〕を憐れみ

栗嶺晨煙憶火牛

栗嶺〔立山のことか〕の晨煙 火牛を憶う

定識新詩囊底滿

定めて識る 新詩 囊底に満たん

金城好更賦重遊

金城〔金沢のこと〕は 更に重遊を賦するに好し

南疇の自宅、養志堂に会した面々のうち、ここに初出の人物につき、南疇自身も含め、簡単に紹介しよう。小川南疇は、名は穰^{すい}、字は子成・孜成・政成。もと加賀藩の医員で、明治に入り士官学校講師等を経て卯辰山〔金沢市〕養生所棟取を務めた。^(注56)

小川清太（?～一九〇九）は、もと金沢藩士で、十三年から二十三年まで河北郡長を務めた。^(注57) 太田雪岳（一八三二～一九〇九）は、名

は良策、美濃里は通称の一つ。維新前は大阪で緒方洪庵の門に入り、金沢に帰って蘭書翻訳校正方となり、軍艦方御用・壮猶

館医学教授等を経た。明治五年に田中信吾等と共に金沢病院を設立した。^(注58) 徳田寛処（所）（一八三二～一八八八）は、金沢人で、医師、

文人画を善くし、書・詩も嗜んだ。^(注59) 堀蘭斎は、藤田維正編輯并出版『同声集』第一卷（十五年四月）に「蘭斎 堀文平」と見え、

同第三卷（同年十月）に「蘭斎 堀敬」と見える人物と思われるが、それ以外は未詳。松平松堂、山田履堂、東郷惺の三人につ

いては情報が得られない。

その他、『食研斎文稿』所載の「紫薇園記」も、この時の王の作品と考えられる。内容は、王が金沢滞在中何度か訪れた牧野慎斎の庭園、紫薇園について記したもので、約四百二十字。

四、再び越前へ

(1)その後、金沢を離れた王治本が四月九日に越前の丸岡で詠んで福井の富田鷗波へ送った作と、王の訪問を受けた鷗波がこれに次韻した作とが、四月十一日の『福井新聞』に載っている。両者とも挙げることにしよう。二人は前年七月に別れて以来、九カ月ぶりの再会であった。^(注61)

丸岡途中口占奉詢鷗波詞兄、請正 王漆園

紅藕花中話別離 紅藕〔紅蓮〕花中 別離を話しぬ

今番緑柳又垂絲 今番 緑柳 又 絲を垂れたり

腰圍減却三分瘦 腰圍 減却して 三分瘦せ

心血嘔成百首詩 心血 嘔きて成す 百首の詩

重到与君曾有約 重ねて到るは 君と 曾て約有ればなり

漫遊笑我竟成痴 漫遊 笑え 我 竟に痴と成れるを

加山能海帰来日 加山〔加賀〕能海〔能登〕より 歸り来らん日

九々橋頭訪旧知 九々橋〔福井の足羽川下流に架かる九十九橋のこと〕頭 旧知を訪ねん

王漆園詞宗袖一律見來訪、走筆次其韻却呈、併政 富鷗波

去年岐路草離々 去年 岐路 草 離々たり

今日衡門柳搭絲 今天 衡門 柳 絲を搭^かけたり

残墨名園千古迹 残墨 名園 千古の迹

民風土俗一囊詩 民風 土俗 一囊の詩

欽君快絶仍超絶 欽う 君 快絶 仍お超絶なるを

愧我書痴更酒痴 愧ず 我 書痴にして 更に酒痴なるを

笑指桃花流水外 笑つて指す 桃花 流水の外

者中情境没人知^(注62) 者中の情境 人の知る没し

その後、五月十九日の『福井新聞』には、甲斐海莊なる人物と王治本の作品が載っている。甲斐の作は、

癸未五月前六日清客王漆園先生偶到干余郷里、^{ママ}滞留纔五日、瞥然將告別還東京。余賦一絶為贐以呈請政 甲斐海莊

東都一別負再期 東都 一別 再期に負^{たが}いたり

喜向海樓把酒卮 喜ぶ 海樓において 酒卮を把るを

無奈遭逢纔數日 無奈^{いかん} 遭逢して 纔かに數日

杜鵑啼血又分離 杜鵑 啼血 又 分離するを

というもので、王の作は「癸未首夏客游三国數日、將乘輪赴敦賀、辱承海莊詞兄賦詩餞行、倚裝次韻留別」と題するものである。甲斐海莊については未詳であるが、以上の詩題と詩句から、三国（現坂井市三国）を郷里とする人で、以前東京で王治本とかかわったことのあったことが分かる。また、王が五月六日に三国にやって来て五日間滞在した後、船で敦賀へ渡り、その後、東京へ帰る予定であったことも知られる。

三国では「龍翔学校頌」という文章ものとしており、『食研斎文稿』に載っている。明治初年オランダ人技師によって設計された木造洋風建築の三国の小学校―龍翔学校の設備や教育をたたえる文章である。約二百三十字。

敦賀には衛鑄生と相前後して入港することになった。五月十六日の『福井新聞』に次のような記事が載っている。

兼て噂ざありし清客衛鑄生氏は去る十二日県下敦賀港へ来着富貴町具足屋三右衛門方へ止宿に●人々の需めに応じ日々毫
を揮はる、よし又先日來福井に滞在なりし王漆園氏も入港あり高木七平方に止宿し此れも揮毫をされ居るとか又玉漆園
氏はそれより西京へ赴かれ衛鑄生氏は武生を経て不日來福せらる、筈なりと云ふ二清客の來遊一時に集ふは奇と謂ふべし

判読しがたい字を「●」で示した。王が宿泊したのは、川寄源太郎『福井県下商工便覧』(二十年)に「敦賀港富貴町 諸国
御定宿 高木七平」と記されている宿屋であろうと思われる。衛鑄生は、清国江蘇省出身の書家・篆刻家で、十二年ごろから
十年餘にわたり数度來日し滞在した。

(2)越前の人との交流の跡ではないものの、その時期からして越前滞在中に執筆したと見られる王の詩文が二篇あるので、こ
こで取り上げておきたい。

一つは高桑致芳編輯『小学口授 新撰養生編』(四書堂梓、十六年八月二十九日)の序である。^(注6)「大清光緒九年歲次癸未春三月中澣
穀旦時客遊北越 瀨東泰園王治本課并書」との識語があり、陽曆に直せば、十六年四月十七日～二十六日の執筆・揮毫という
ことになる。この書物は「儒にして医」である高桑が独自の「養生の道」を開陳したもので、王は「編中皆苦口藥石の言にし
て、以て世を警む可く、以て時を濟う可し」との評価を与えている。

高桑は松村西莊とも関係のあった人であるが、一方、政治的活動にもかかわっており、十五年十一月二日には富山滞在中の

藤田茂吉に会いに行っている。(注64) そのころ王と知り合ったことも想定できるかもしれない。(注65)

もう一つは、後に富山県会議員になる石坂専之介(一八四九―一九一五)(注66)に頼まれて王治本が寄贈した、石坂の「栗山草堂」の題詠である。桂正直編『中越名士伝』(清明堂、二十五年)「石坂専之介君伝」から、関係する部分を引用しよう(漢詩文には書き下し文を付け、語注も施す)。

(石坂) 君又郷里升方山下(注67)に一堂を構へて游息の処と為さんと欲し画人内海吉堂に嘱して其図を作らしむ是れ風致を画図に模倣せんか為めなり図已(ママ)に成るに及んで命けて栗山草堂と曰ふ。因て栗山草堂主人と号す而して清客王麥園(ママ)は嘱に応し(ママ)で題詠を寄贈せり今之を左に録す

雲峯暈々樹蒼々 雲峯 暈々として 樹 蒼々たり

中有栗山一草堂 中に栗山 一草堂 有り

林密不容車馬到 林 密にして 車馬の到るを容れず

其人高臥似南陽 其の人 高臥して 南陽(諸葛亮のこと)に似たり

石坂君帰隠栗山、如李愿之帰盤谷、有終焉之志。吉堂兄為作草堂図、山色・溪声・竹籬・茆舍、一一摸写逼真。

図成、郵寄索余題詠。余披覽之、如恍身入此中、幾欲叩扉相訪也。卒題一絶、以塞所嘱。未審当二君意否耶。「石坂君の栗山に帰隠する、李愿の盤谷に帰るが如く、終焉の志有り。吉堂兄 為に草堂図を作り、山色・溪声・竹籬・茆舍、一一摸写して真に逼る。図成り、郵寄して余に題詠せんことを索む。余 之を披覽するに、恍として身 此の中に入るが如く、幾ど扉を叩きて相訪わんと欲せしなり。卒に一絶を題し、以て嘱する所を塞ぐも、未だ二君の意に当たるか否かを詳らかにせず。」

光緒癸未初夏月、時游次角鹿

澗東麥園王治本題并識

「光緒癸未初夏月」は陽暦の明治十六年五月七日～六月四日の間に相当する。「角鹿^{つめが}」は敦賀の古名である。

おわりに

王治本はその後、東京へ帰った。途中の消息として一つだけ分かっているのは、彼が美濃の大垣の野村藤陰（一八二七～九九）のもとに立ち寄っていることである。『藤陰遺稿詩』に次のような作がある。

聴泉亭雅集、晤清客王黍園、兼送其東行

萍蓬相遇是前縁　萍蓬　相遇うは　是れ前縁

只恨歛筵即別筵　只恨む　歛筵　即ち別筵なるを

重対杯樽又何日　重ねて杯樽に對するは　又　何れの日ならん

半宵剪燭儘留連　半宵〔深夜〕　燭を剪りて　儘^{つと}めて留連す

『藤陰遺稿詩』は藤陰の作品を制作順に配列していることが看取できる書物であるが、一つ前の作と三つ後の作の題に、それぞれ「四月十六日」、「九月十五夜」（いずれも十六年 陽暦）とあるから、その間の作品ということになる。さらに上述の越前での事跡を考慮に入れば、その幅をもっと狭めることができ、王が藤陰のもとを訪れたのは、五月から六月にかけてのころだっただろうと見られる。藤陰の弟子、戸田葆堂（一八五一～一九〇八）の『覆瓿餘臺』（岐阜県図書館所蔵の葆堂の詩の稿本）に記された「癸未晚春過水竹居、示主人交翠」という題の詩に王治本の評が付されているが、これもその時のことであつただろう。

ただ、王治本はあまり寄り道をせずに東京まで帰っていったのではないだろうか。なんとすれば、七月からまた、函館→越後→函館の一年半にわたる大旅行に出かけることになるからである。

謝辞

本稿を草するに当たり、松村寿氏、南砺市文化財審議会委員・南砺市立福光美術館運営委員の辻澤功氏、南砺市立中央図書館司書の堀内美幸氏に多くの貴重な資料を閲覧させていただき、また、多くの有益な教示をいただいた。ここに記して謝意を表する。

注

1 拙稿「明治十五年 王治本の旅と詩文交流―旅立ちから東海道を経て越前滞在まで」、『武庫川国文』第八十号、二〇一六年三月。

2 一九六四年当時、金沢の市史編纂室所蔵。山岸共氏の祖父や父も筆談に加わっている。

3 さねとうけいしゅう「王治本の金沢での筆談」、同氏『近代日中交渉史話』（春秋社、一九七三年）所収。

4 筆者が二〇一六年秋、福光で現地調査をした際、福光の松村一族の一人で、安永六年に開業した松村薬局を受け継いで経営しておられる松村寿氏は松村茂平について、聾・啞・跛の三重苦を背負っていた松村西莊（前掲拙稿二十三頁）に付き添って身の回りの世話をしていた人物ではないかとの見解を述べられた。なお、日中友好に尽くした松村謙三も出ている福光の松村家については、富山新聞社報道局編『越中百家』下巻（富山新聞社、一九七四年）二一七～二二三頁「日中のかげ橋 松村家（福光） 中国にかけた50年 貫いた反骨の謙三氏」に詳しく、「松村家略図」も載っている。なお、松村寿氏には、福光の今昔について述べた『福光ゆめ散歩』（松村懸壺堂文庫、二〇〇七年）の著書がある。

5 横山政和（一八三四～一九三）は、もと加賀藩家老、廃藩後は神社の宮司。日置謙『改訂増補 加能郷土辞彙』（北国新聞社、一九五六年）九四九頁。石川県『石川県史 第参編』（石川県図書館協会、一九七四年）三三二頁。北国新聞社出版局編『石川県大百科事典』（北国新聞社、一九九三年）一〇一二、一〇一三頁。

6 この山岸弘が共氏の祖父であると思われる。なお、その生卒年は、『石川県史 第参編』によれば、一八三三～一九〇四年。

- 7 藤田維正編輯并出版『同声集』の卷三、四（いずれも十五年）等に「咸齋 山本愿」の作品が載っている。『改訂増補 加能郷土辞彙』に「山本愿中 号は咸齋」として立項されている人物ではないかと思われる。だとすれば、加賀藩の老臣長恭連（一八四二～一八六八）の医員で、詩を林蔭坡（一七八一～一八三六）に学んだ（九三二頁）人物である。
- 8 松村西荘は千阪と「深く相識る間柄」であつたという。石崎寛『桜所文獻 近世福光町史』（石崎寛）一四三頁。
- 9 宮島誠一郎（一八三八～一九一一）は元米沢藩士で、官僚・政治家として活躍した。
- 10 石崎家については『越中百家』下巻一九九～二〇四頁「南砺振興の石崎家（福光） 寛永から加賀藩御扶持人十村」に詳しい。
- 11 石崎寛編輯、吉波彦作謄写『桜所文獻 松村西荘』（南砺市立中央図書館蔵）第三冊二〇七、二〇八頁。
- 12 文中の「含津」（ふくみつ）は福光のことであるが、松村寿氏によれば、福光をこのように称する例は他に見られないとのことである。
- 13 松村和一郎については『越中百家』下巻「日中のかけ橋 松村家（福光） 中国にかけた50年 貫いた反骨の謙三氏」に、松村薬局の五代で、「金沢大学」の前身、金沢医学校の製薬生となり、「富山県内では薬剤師の草分けともいえる」人だったと述べられている（二一八頁）。
- 14 石崎寛『桜所文獻 近世福光町史』一九三～一九四頁。
- 15 松村寿氏家蔵の屏風に、松村西荘・永山亥軒らの作品と並べて、後者の詩を揮毫したものが表装されている。
- 16 『金城新誌』は加賀の牧野一平（一八四一～一九一〇）が十八年に創刊した雑誌。芳井先一編『石川県大百科事典』（北国新聞社、一九七五年）七〇八頁。
- 17 石崎寛『近世福光町史』一九三～一九四頁。
- 18 石崎寛編輯、吉波彦作謄写『桜所文獻 松村西荘』第三冊二〇八～二一〇頁。
- 19 迎月亭の外観、及び書軸をも含む亭内の写真が、兼久文治・津山昌監修『富山の茶室』（桂書房、一九八七年）六十～六十一頁に掲載されている。
- 20 その他、筆者が二〇一六年秋、福光で行った調査により知り得た事柄を付言しておこう。一、松村寿氏邸に王治本が王羲之の「清晏帖」を揮毫した半切が保存されている。一、『近世福光町史』八四三頁に写真が掲載されている、松村西荘の少年時代の金沢での師、永山亥軒（一八一五～一七九。金沢藩士）の筆稿に対する王治本の批評文の保有者の武田氏とは、福光の西町に生まれ、町議会議長を務め、歌集も残された武田吉三郎氏（一九一三～一九九七）である。一、南砺市立中央図書館に、王治本が明の高啓の「梅花九首」其の四を揮毫したものを表装した書軸が収蔵されている。

21 この山岸千吉が共氏の父であると思われる。山岸千吉については、藤田維正編輯并出版『同声集』第一卷（十五年）に「剛堂 山岸千吉」と見える。剛堂と号したようである。

22 小池梅所（梅処とも。一八三二～一九一三）は金沢の御徒町に住み、上海にも遊歴して南宋文人画を能くし、篆刻も能くした人。畑中榮「加越能詩作者略傳 その2「おゝこ」」（金沢高等学校総務部編『紀要』三十五号、二〇〇七年）。河波櫻園（棕園とも。一八二二～九〇）は明治元年、明倫堂助教となり、自らも「梅塢塾」を開いて諸生に教え、この間輪島小学師範学校や農学講習所教授に任じた人。蒲生重章「近世偉人伝 義字集 五編」下（二十四年 二十四～二十六丁、玉井敬泉編『加能画人集成』（金沢文化協会、一九三五年）十七頁、「改訂増補 加能郷土辞彙」三〇六頁、石川県『石川県史 第参編』（石川県図書館協会、一九七四年）三三八～三三九頁。井口孟徳（一八二二～八四）は、通名嘉一郎、字は孟篤（徳）、号は犀川、維新前、加賀藩の老臣横山氏に仕えて儒臣であつたが、維新後は文学教師となつて諸学校に教鞭を執つた。和田文次郎『金沢墓誌』（加越能史談会、一九一九年）三十頁「井口嘉一郎」の項、「改訂増補 加能郷土辞彙」九八八頁、石川県『石川県史 第参編』三二六～三二八頁、畑中榮「加越能詩作者略傳 その1「あゝえ」」（金沢高等学校総務部編『紀要』三十四号、二〇〇六年）。中村竜溪（一八五七～？）は、明治八年三月師範学校に入学、卒業の後、石川郡相川小学校五等訓導に任ぜられ、次で松任小学校、栗ヶ崎小学校へ転任した人。ループル社出版部編『大日本人物名鑑』巻四の一（ループル社出版部、一九二一、二二年）。

23 亀田貞勝（一八一八～一八八三）は金沢の薬種商で、文雅を好んだ。『改訂増補 加能郷土辞彙』二二四頁、畑中榮「加越能詩作者略傳 その2「おゝこ」」。

24 岡田順二は後述の岡田呉陽の通称。

25 前田則邦（一八四七～一九一五）は富山藩主前田家の分家である若土前田家の祖、利民の長男で、廃藩置県後は富山第二百二十三国立銀行（現北陸銀行）頭取、富山市長などを歴任した。富山市郷土博物館編集・発行『富山市郷土博物館・富山市佐藤記念美術館 特別展 若土前田家の人々―お殿様の孫 前田則邦が生きた幕末・明治』（二〇一五年）。

26 『絶史論存』は『経史論存』の誤り。十二年出版の関義臣編纂、全六巻の『経史論存』（内藤伝右衛門）と、十三年六月出版の関義臣編、全十五巻の『日本名家経史論存』（温故堂）がある。前者は未見だが、後者には評点者の一人として王治本も加わっている。

27 横山政和『環翠楼詩鈔』（札幌・横山隆起、三十五年）。

28 さねとうけいしゅう「王治本の金沢での筆談」一五〇頁。

29 なお、参考までに、『環翠楼詩鈔』において後者には小野湖山の「巧穩勝茶園粗笨詩遠矣（巧穩にして、茶園の粗笨なる詩に勝ること遠し）」。

敬服敬服」との評語が付されている。

30 亀谷龍二・橘米次郎編『越中古今詩鈔』（光奎社、一九二六年）乾七十二。

さねとうけいしゅう「王治本の金沢での筆談」一四八頁。

32 内山家については、『越中百家』下巻、一六頁「富山藩十村役 内山家（富山）神通の廃川地を開く」に詳しい。

33 藤田茂吉（一八五二～一九二）は、号鳴鶴。新聞記者・政治家。明治八年、郵便報知新聞社に入り、主幹。

34 『桜所文獻 近世福光小史』一九〇頁。

35 「栗本翁」は、『郵便報知新聞』の主筆を務めた栗本鋤雲（一八三二～一九七）のこと。なお、これと同じ文章が、福光町史編纂委員会編『福

光町史』下巻（福光町、一九七一年）には、藤田茂吉「北遊日記（抄）」からの引用として、十一月四日のこととして記されている（五〇三頁）。

「北遊日記（抄）」なる文獻の所在の不明であることが問題であるが、それとは別に、『郵便報知新聞』所載の「北遊紀行」の記載にも疑わしい箇所がなくはない。同紙は「北遊紀行」以外の記事においても数回、藤田ら一行の動静を報じている（これも旅行の同道者からの通信に基づくであろうが）のだが、十五年十一月十一日の記事では、藤田・久松の「阿氏は翌三日砺波郡福光、今石動、射水郡高岡に向て」富山を発足せられたと記し、二日に富山を発ったとする「北遊紀行」の記載と、日にちが一致しない。

36 富山新聞社大百科事典編集部編『富山県大百科事典』（富山新聞社、一九七六年）一三六頁。

37 小杉照「復堂遺文」（小杉醇、一九三〇年）上巻所収「復堂先生事略」。石川県第二師範学校は現在の富山大学教育学部の前身で、開校当初、富山にあった。富山県の成立は十六年のことである。その他、復堂は上述の山岸千吉により漢学を修めたと言われている（さねとうけいしゅう「王治本の日本漫遊」二〇八頁）。

38 北村勝三編輯兼出版『觀光餘影』（十八年）に停雲の七絶一首が載り、そのように注記されている。

39 二首とも『呉陽遺稿』巻一所収であるが、前者は岡田正之『越中古今詩鈔』乾にも収録されている。岡田正之（一八六四～一九二七）は呉陽の二男で、東京帝国大学教授を務めた。

40 「停雲」は陶淵明の「停雲」詩に基づき、親しい友を思うの意。

徐翁は後漢の徐穉のこと。「徐翁孤榻」は陳蕃が徐穉のためにわざわざ設けた榻（長椅子）のことで、来客を好む意の典故。

42 この句は、杜牧の七絶「贈別」の転・結句「蠟燭有心還惜別、替人垂淚到天明」を連想させる。

43 注1所掲拙稿二十二～二十六頁。

- 44 有馬龍斎・関三編『七曲吟社詩』、東生亀次郎。
明治六年一月一日を以て、陰暦から陽暦に改められた。
- 45 烟中榮「加越能詩作者略傳 その1「あゝえ」」。
- 46 「源」のホームページによれば、江戸時代、「旅館の主人で風流人であった源梅山」は、「料理業を中心として吉川屋を営」み、また、「茶人として、富山の文化交流と、発展に寄与し」、明治初期、梅山の息子の金一郎がこの楼の初代の主人となったという。天人楼は今も鱒寿司等の弁当の販売店として、その屋号を存続している。
- 47 前田則邦については注25を参照されたい。
- 48 石割村の杉木家については前掲『富山県大百科事典』四三三頁の「杉本文書」の項に詳しい。
- 49 烟中榮「能登詩情―漢詩で読む能登―」（うつのみや、二〇一四年）四十八―四十九頁。なお、江馬天江（一八二五―一九〇二）は京都在住の医者にして漢詩人。
- 50 「光緒癸未仲春」は明治十六年三月九日～四月六日の間に相当する。
- 51 佐久間龍太郎著作権発行『大正十一年版 北陸人物名鑑』（一九二二年）一九二―一九四頁、北國新聞社出版局編『石川県大百科事典』一七二頁、烟中榮「加越能詩作者略傳 その2「おゝい」」。
- 52 小川政修編輯兼発行『南嶸遺稿』（四十二年）所収。
- 53 「晨煙」は朝の雲霧または炊事の煙。「火牛」は戦国時代の斉の田单が用いた奇計で、牛の角に兵刃を束ね、尾に葦を結び付けて点火し、夜陰に乗じて敵陣に放つもの。ここでは、その結果立ち昇る煙のことか。
- 54 『南嶸遺稿』所収「養志堂記」による。
- 55 和田文次郎『金沢墓誌』三十一頁、黒本植『三州遺事』（石川県立図書館、一九三一年）十七―十九頁、『改訂増補 加能郷土辞彙』九九二頁、石川県編『石川県史 現代篇(2)』（一九六三年）一一五一頁、石川県『石川県史 第参編』三三七頁、烟中榮「加越能詩作者略傳 その2「おゝい」」。
- 56 和田文次郎『金沢墓誌』六頁、烟中榮「加越能詩作者略傳 その2「おゝい」」。
- 57 和田文次郎『金沢墓誌』十六頁「大田美農里」の項、金沢市医師会編『金沢医師会医政史』（金沢市医師会、一九四三年）二十―二十二頁「大田美農里」の項、その他。藤野恒三郎・梅溪昇編『適塾門下生調査資料』第二集（大阪大学、一九七三年）十八―十九頁、石川県『石

川県史 第参編『三三七〜三三八頁、畑中榮「加越能詩作者略伝 その2「お〜こ」」。

59 和田文次郎『金沢墓誌』五十二頁、玉井敬泉編『加能画人集成』（金沢文化協会、一九三五年）十六頁。

60 「癸未四月初九日」との日付がある。陽暦としか見せない。

61 十五年七月、越前における二人の交流については、注1所携拙稿二十九〜三十三頁。

62 四月十三日の『福井新聞』所載の「正誤」により、「詢」を「詢」に、「黍」を「漆」に、「量」を「墨」に、それぞれ改めた。なお、鷗波の作は彼の『還読斎遺稿』に「王黍園、自越中来訪、有詩見似、輒次其韵」という題で載っており、ここでは「者」を「這」に、「境」を「況」に、「没」を「少」にそれぞれ作る。また、『福井新聞』所載の鷗波のこの詩の後には「先生北遊詩草中有富山古城及公園地等記文第三句故云」という自注があり、それにより、王治本が北陸漫遊中の詩作を一つにまとめていたらしいことが知られる。

63 この序も『食研斎文稿』に「《養生編》序」という題で収載されている。

64 石崎寛『桜所文献 近世福光町史』一四五頁。

65 なお、『小学口授 新撰養生編』の奥付には「編輯人 富山県平民 高桑致芳（石川県金沢区母衣町十五番地寄留）」とあり、金沢に住んでいたようである。

66 畑中榮「加越能詩作者略傳 その1「あ〜え」」。

67 升方山は魚津市にある山。

68 平野豊次郎編輯兼発行『藤陰遺稿詩』（四十一年）卷之六、二十二。

（しばた・きよつぐ 本学教授）